

医史学の伝統復活 薩摩琵琶

酒井 シヅ¹⁾, 岡田 靖雄²⁾

¹⁾順天堂大学医学部医史学研究室, ²⁾青柿舎(精神科医療史資料室)

第110回日医史学会総会(前山隆太郎会長, 青木歳幸実行委員長, 佐賀市)は6月6日夜の懇親会にすばらしい贈り物を用意していただきました。106年前の薩摩琵琶「先哲祭手向の歌」の復活である。まずその詞をあげておこう。

おほなむち すくなひこなの 神代より
世々のひしりか うつしきや あを人草の
ともすれは てる日にしをれ つゆしにも
うつろひゆくを 春のいろに かへさんものと
いそしみし 其跡をしも 今の世に
たれか仰きて しのはすの 池のはちすの
ねもころに つかふるわさを あはれとや
あまかけりても みそなはずらむ

〔“つかふる”は“つたふる”の誤りか〕

これは、1893年(明治26年)3月4日午後、上野不忍池畔長舵亭における第2回医家先哲追薦会で演じられたものである。山崎佐が「医家先哲追薦会四十五年日本医師協会創立二十年記念特輯」(『日本医師協会雑誌』第13巻第2号より第11号にいたる付録, 1936年, 1937年)にしるすところでは、祭式をおえ, “次で「先哲祭手向の歌」(井上通泰作)を印刷したものを一同に配附し, 宮春某に囑して薩摩琵琶に和して歌はしむ”。

作詞者井上通泰(1866-1941)は、松岡操の子で井上家の養子となった。弟に柳田國男・松岡静雄・松岡映丘あり。帝国大学医科大学では呉秀三, 土肥慶藏, 宮入慶之助, 森篤次郎が同級であった。1890年卒業ののち眼科を専攻して, 1895-1902年と第3高等中学校(岡山)の教授, のち東京で開業。また松波資之に私淑して和歌をまなび, 1907年には宮内省御歌所寄人となり, 1920年には宮

中顧問官となった。

この詞は、岡田がかいた「日本医史学会の歩み」(『日本医史学会総会百回記念誌』, 2000年)には採録してなかった。酒井が1999年(平成11年)5月14日, 朝日ホールでの「第百回日本医史学会総会を迎えて」の会長講演の中に, 明治26年第2回先哲祭では, 井上通泰先生作の「先哲祭手向の歌」が薩摩琵琶で演奏されたと述べたものに, 前山会長が目をとめられたものである。

さて, 当日これを演じてくださった北原香菜子さんは1983年佐賀市生まれ, 2005年早稲田大学第1文学部卒業。2001年大学入学時に薩摩琵琶とてい、2004年より本格的に薩摩琵琶(鶴田流)を田中之雄氏に師事した。現在全国各地だけでなく海外でも公演をおこなっている。その音・声はズンと腹にひびき, 心をゆりうごかした。つづいて, 草場紀久子さんのフルートとのコンビネーションがあり, これもすばらしいものであった。

1892年(明治25年)3月4日第1回『先哲祭』の記録は、『日本医史学会総会百回記念誌』に資料としてつけられている。それによると, “尚余



薩摩琵琶を演奏する北原香菜子さん
(写真提供 前山隆太郎氏)

興トシテ宮春氏ノ薩摩琵琶数曲アリ”。これらのほかに、医家先哲追薦会で薩摩琵琶の演じられることがあったようである。

くだって、1928年(昭和3年)3月4日午後第37回医家先哲追薦会が、奨進医会・日本医史学会の合同で回向院においてひらかれた(日本医史学会はその前年の11月14日に創立されていた)。式典・記念撮影をおえて一旦散会したのち、夜神田多賀羅亭で講演および晩餐会があった。講演ののちには、足立蘆光「蘭学創始(琵琶歌)」もあった。この青雲流琵琶歌は前年も演奏されたものであった。作詞は富士川游である。この詞は『中外医事新報』第1134号(1928年)にのったものを、岡田「日本医史学会の歩み」に採録してあるが、ここにもう一度記録しておく。

蘭学創始

富士川游 歌
足立蘆光 曲

檐滴水 尚ほ能く石を穿つ 精神一度到らば
何事か成らざらむ 室町幕府の末つ方 ポルトガルをば先頭に スペイン、イギリス、オランダと 次第へに渡り来て 新奇の文物伝へしも 横文字の、文読む事は禁ぜられ 話すこと又自由ならざれば 其学伝ふる人も無し 徳川幕府の半ば頃 青木昆陽世に出で、こゝに志を立てしより 其事僅かに緒につきて 其後承けし前野大人 その余の士の摯実の 願や天に届きけむ 時しも明和八年の三月四日 小塚原なる仕置場に 腑分けのことありと聞き 前野、杉田、中川の大人達は 携へ行きたる和蘭の 解剖図譜と照し視て その精妙に驚きつ 訳してこれを伝へなば 道の為又人の為 益あることも 大ならむ 善は急げとあくる日に 前野の宅に打ち集ひ 蘭学創始の大業に 手を著けしこそ勇ましけれ 嗚呼事の成るは固より 天にあり しかれども成すべきことは人にあり 前野蘭化がたゞ一人 僅か数百の単語をば 学び知れるをたよりとし 字引一冊持たずして

図譜の文字に向ひたる その志の篤きには 天神地祇も動きしか 四年の後に翻訳の 大業全く成りしかば 解体新書と標題し 梓に上してこれを世に 弘めてしかば世の人は 始めてここに和蘭の 文字よむすべを知りにけり

経営漫^ニ費^ス人間^ノ力。大業^ハ全^ク依^ルニ。造化^ノ功^一

前野蘭化が謙譲の この言の葉に包まれし 玉の光はあざやかに 今の世までも輝きて 学びの孫の吾人が 千歳不磨の偉業をば 語り伝へて諸共に 蘭学創始の功德を 仰ぐことこそ尊とけれ。

原文には、“地ノ中”，“大千”，“地ノ下”など、琵琶の曲づけをしめすらしい語が、漢文の返り点のようにつけられていたが、それは省略した。

薩摩琵琶あるいは琵琶はこのように、日本医史学会の前身奨進医会のいわば伝統であった。今回佐賀においてこの伝統が復活されたのはなんともありがたいことで、これを準備された前山会長、青木実行委員長はじめ実行委員の方がたにはふかくお礼をもうしあげる。

岡田は『日本医史学会総会百回記念誌』の「編集後記」に“どなたかのお力で琵琶歌「蘭学事始」の再現はできないものだろうか”とかいた。北原さんの演奏をきいたいま、この願いはさらに切である。

飛行機が佐賀平野にちかづくとき、緑でなく茶の短冊がづらなっていた。二毛作としてビール麦の栽培がさかんなのだとのことだった。そして佐賀市内いたるところに、きれいな水がながれていた。

麦秋や 佐賀の学会 水きよし

佐賀の初夏 うらゆるがせり 薩摩琵琶

医史学の 伝統復活 薩摩琵琶

(青人)